

氏 名(本 籍)	さい だ ゆき ひさ 齋 田 幸 久 (三 重 県)
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	博 乙 第 617 号
学位授与年月日	平成 2 年 7 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	医 学 研 究 科
学 位 論 文 題 目	胃癌の壁外進展とその組織型 (Dissertation 形式)
主 査	筑波大学教授 医学博士 中 村 恭 一
副 査	筑波大学教授 医学博士 大 菅 俊 明
副 査	筑波大学教授 医学博士 大 貫 稔
副 査	筑波大学教授 医学博士 小 磯 謙 吉
副 査	筑波大学教授 医学博士 辻 井 博 彦

論 文 の 要 旨

〈目 的〉

本研究の目的は、画像診断の手法によって、壁外に進行した胃癌の癌組織型による生物学的ふるまいの差異を実証することにある。さらには、それらの結果を踏まえて、そこから臨床的に有用である画像診断上の特徴的な所見を抽出することにある。

〈材料と方法〉

対象は本学における過去 5 年間の胃癌および胃癌術後症例 194 例のうち、臨床経過中に閉塞性黄疸を来した 18 例と閉塞性尿路障害を来した 24 例である。それら対象のコンピュータ断層撮影 (CT) および X 線造影 (胆管造影, 経静脈性尿路造影) について検討し、それら所見と癌組織型との比較を行った。

〈結 果〉

閉塞性黄疸を来した胃癌症例の組織型の内訳は、分化型癌 8 例, 未分化型癌 9 例, 分類不能 1 例である。再発の単独徴候として閉塞性黄疸が出現したのは、分化型癌 8 例中 3 例あったが、未分化型癌には 1 例もなかった。拡張した胆管を取り巻く限局性の腫瘍形成は、CT による画像診断上 “ドーナツサイン” として表現される。この所見は分化型癌に特異的な所見であり、分化型癌 8 例中 6 例に認められた。一方、未分化型癌では、広範な癌浸潤の部分現象として胆管周囲浸潤が生じるので、同時に、広範な後腹膜浸潤、あるいは腹膜浸潤を伴っていることが多く、“ドーナツサイン” を示したものは 1 例もなかった。

閉塞性尿路障害を合併した胃癌 24 例のうち、癌組織型の診断がなされたのは 22 例である。その内訳

は未分化型癌が19例、分化型癌は3例のみであった。癌のびまん性浸潤にもかかわらず、尿管や膀胱の粘膜は比較的良好に保たれ、管腔の伸展性のみが障害される結果、画像上では“糸状尿管”および“いがぐり様膀胱”の所見を呈し、これらは未分化型癌において特徴的な画像所見であると云うことが出来る。

〈結 論〉

進行した分化型癌において、術中の胆管周囲リンパ節（肝十二指腸間膜リンパ節、脾十二指腸リンパ節）の徹底した郭清とともに、術後の経過観察におけるこれらのリンパ節の慎重なCT上の読影が必要である。CT上、“ドーナツサイン”が認められる場合は胆管周囲の再発であり、それが閉塞性黄疸の主たる原因となっている。分化型癌は限局性発育を呈するので、胆管周囲リンパ節に対する放射線照射療法や外科的切除などの局所治療が考慮されるべきである。

未分化型癌においては、癌の進展はびまん浸潤性であり、尿管膀胱粘膜変化の乏しさに比べて癌の拡がりが多い。それら管腔臓器の伸展性が癌浸潤によって障害される結果、“糸状尿管”や“いがぐり様膀胱”の画像所見となる。

画像上の診断は、癌組織型を考慮した総合的なものでなければならない。それを考慮することによって、的確な診断のもとに無用な外科手術を避けることが出来、さらには患者の予後の推測と治療法の選択を的確に行なうことが出来る。

審 査 の 要 旨

本研究は、我が国に最も多い悪性腫瘍である胃癌について、近年一般化されたCTを主に用い、従来の画像診断の手法である胆管造影・尿路造影による診断法を取り入れて、画像診断の総合的な解析を行なったものである。進行した胃癌の画像診断において、閉塞性黄疸と閉塞性尿路障害に注目することによって、癌組織型別による生物学的なふるまいという視点から、分化型癌と未分化型癌の画像診断上の特徴像を見い出すことに成功している。すなわち、本研究は分化型癌における肝十二指腸間膜リンパ節腫大をCT上の“ドーナツサイン”、そして進行した未分化型癌による後腹膜浸潤を“糸状尿管”、“いがぐり様膀胱”としている。その独創的かつ基本に忠実な着眼点は、画像診断をただの画像診断に終わらせずに、画像診断を病理解剖学的診断にまで近づけた研究である。

よって、著書は医学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。